

ヴィクラマ王物語

『プラバンダ・チンターマニ』(物語の如意宝珠) から

原作：メールトゥンガ・アーチャーリヤ

(13、4世紀 インド・グジャラート)

新 井 俊 一

解 説

紀元前2300年には成立していたインダス文明に始まるインドの歴史は、民族・言語・思想・宗教・文学・美術・建築などあらゆる面において多様性をはらんで発展してきた。いま紹介しようとしている文学作品は、13・4世紀に西インドの今のグジャラート州に当たる地域で活躍したジャイナ教の僧侶メールトゥンガの著になる『プラバンダ・チンターマニ』(話の如意宝珠)の最初の部分「ヴィクラマ王物語」である。なお、ジャイナ教とは、釈尊とまったく同時代(紀元前5世紀頃)に同地域(ガンジス流域)で教えを広めたジナ・マハーヴィーラの創始になる非バラモン系宗教で、不殺生・不所有の重要性を説き、インド文明に多大の影響を与えてきた。今でもインドに百数十万もの信者がおり、社会的経済的にも大きな勢力を持っている。

インドの古典時代はグプタ朝時代(紀元320年頃-550年)に頂点に達し、特に古典語であるサンスクリット文学ではカーリダーサがでて優れた戯曲や叙情詩を多く生み出した。しかしその後は、異民族の侵入や諸王間の覇権争いが続き、政治的社会的には非常に不安定な時代に入る。そして文化面では各地方王朝の保護のもとに、それぞれ独自の発達を遂げることになる。8世紀頃から社会的勢力として現れ、さまざまな王朝を中部ないし北部インドに建設したのは「ラージプート」族と総称される人々である。これは「王の子」という意味であり、それぞれの祖先の出自を古代の「クシャトリヤ」諸王家や、神話的人物に求めているが、その起源は明確にわかっていない。この点『プラバンダ・チンターマニ』では、取り扱っている英雄の起源が極貧の流れ者であったり、盗賊であったりしており、この方が真実に近いものと思われる。しかしこれらラージプートを名乗った人々が自らの武勇に誇りを持ったことは、日本の武士たちや西洋の騎士たちと共通している。

ラージプートの興隆とほぼ一致して、8世紀頃から「プラバンダ」や「チャリタ」と呼ばれる文学のジャンルが成立した。これらは歴史上の人物の事績を物語風に叙述したもの

である。「チャリタ」は主人公の在世中に書かれて、その主人公をほめ讃える内容のものが多く、「プラバンダ」は過去の人物を取り上げて、教訓的にその人物の事績を述べるのが普通である。ジャイナ教徒はこのプラバンダ文学の創作に熱心であった。多くはジャイナ・サンスクリットで書かれ、時には登場人物に合わせてジャイナ・シャウラセーニー語や10世紀頃の俗語アパブランシャ語を混ぜている。ジャイナ・サンスクリットは古典サンスクリットに近いが、古典サンスクリットの文法に合わない用法や、当時の俗語から借用した用語が現れることがある。したがって、プラバンダ文学の直接の読者はサンスクリットの知識を持った僧侶階級であり、新しい僧侶を訓練したり、僧侶全体の教養を高める目的を持っていた。さらに、僧侶が信者に対して説法する際の話題や余興を提供する種本の役割も担っており、布教者はよく知られた歴史上の人物の逸話を話しながら、その話しに埋め込まれたジャイナ教の教義や価値観を信者に植え付けて行ったものと思われる。

【プラバンダ・チンターマニ】は、その奥付けによると、ヴィクラマ暦（またはヴィクラマ紀元：元年は西暦紀元前58-57年）の1361年（西暦1304年）に完成した。グジャラートのヒンドゥー王国がデリーから侵攻したイスラム勢力に打倒されるのは西暦1297年頃であり、筆者がこの時にグジャラートの諸王を伝説上の英雄ヴィクラマの後継者として描いたこの作品をこの時期に書いたのは、何かやむにやまれぬ動機があったのかも知れない。この作品の中心部分はグジャラートのチャウルキア王朝（西暦940年頃-1297年頃）の編年体の歴史書の体裁をとっている。インドの文書としては珍しくさまざまな歴史的事件の年・月・日をヴィクラマ紀元で記載している。しかしこれは上にも述べたように、チャウルキア王朝の諸王がヴィクラマの徳を受け継いでいるという主張からなされたものと思われる。

「ヴィクラマ王物語」はヴィクラマ紀元を始めたとされる伝説上の人物についての話である。伝説によると、ヴィクラマ王はインドの覇者となって、西インドに勢力を奮っていたサカ族（またはシャカ族）を征服したといわれている。ヴィクラマ紀元はこの勝利を記念したものだと言われている。ヴィクラマ王の存在性については過去100年近く論議されてきたが、今でも明確な手がかりはない。この王が活躍したといわれる紀元前1世紀にはインドは分裂していて、我々の知る限り、伝説にでて来るような大帝王はいなかった。最も有力な説は、グプタ王朝最盛期の王でヴィクラマ・アーディティヤと号したチャンドラグプタⅡ世(375頃-414頃)が伝説化されて数々のヴィクラマ王の物語になったのではないかという見解であるが、それでもなぜ西暦紀元前58-57年がヴィクラマと最もゆかりのある年になったのかは分からない。またヴィクラマ紀元が使われはじめ、ヴィクラマの物語が書かれ始めるのも西暦9世紀以後であり、ヴィクラマ伝説が成立したのもおそらくこの頃であろうと思われる。この王についてはきわめて多くの伝説があり、荒唐無稽な武勇や施しの話がほとんどである。この王は不思議な力を持つ数人の家来を従えていたと言われる。アラジンの魔法のランプの精を思わせるアグニヴェーターラ、無尽蔵の富を与える「スヴ

アルナ・プルシャ（金人）、詩聖カーリダーサなどである。それらのうちの何人かは、いま紹介する物語の中にも現れて来る。また王自身も数々の魔法の術を心得ていたと言われる。

これから紹介するジャイナ版ヴィクラマ王物語は、ヒンドゥー系の伝説では主流となっている非現実的な武勇談や施しの話を簡略化して前半部（第6話まで）に連続的に配置し、ヴィクラマが勇気と知恵の力によって世俗的な成功をおさめて行く過程の話としている。そして後半部分ではジャイナ教の高僧シッダセーナとの出会いによる内面的深化の話に転じている。前半の話の一つ一つは広く流通していた話であるが、後半部分はジャイナ教徒の創作である。このようにジャイナ教は10世紀前後から広く有名になったこの王の話を取り込んで、ジャイナ教の道徳・倫理観の典型として用いたのだと思われる。

なお、この翻訳は筆者がハワイ大学大学院で博士論文を作成するために『プラバンダ・チンターマニ』全体を英訳していたものを、いままた原典に照らし合わせながら、日本語訳をしたものである。この翻訳にあたっては、1901年に発行された唯一の英訳であるC. H. Tawneyの訳と注釈も参考にした。今後、順次この作品全体を英訳および日本語訳で出版したいと思っている。また、この物語の文学的・歴史的分析については、また稿を改めることとしたい。

〈プラバンダ・チンターマニ〉

オーム！¹ 全知者に帰命したてまつる。

ナービ王の子、最勝者なるジナ・ルシャバナータ²

生死に終わりをもたらす者よ、³

言の葉の女神、四つの顔を持つサラスヴァティーの

美しい四つの扉を守れ。⁴

|| 1 ||

月の光が石を溶かすごとく、

石のような心を持つ子どもを溶かしてしまう手をもった

かのたぐいなき師、三日月を印とし多くの著述を持つ

チャンドラ・プラバを、私は念ず。⁵

|| 2 ||

賢者の理解を易しくするため、

さまざまな書籍の紐をといて、⁶

メールトゥンガは多くの散文の著作から

この書を纏める。

|| 3 ||

宝の鉱山から宝石を取るごとく、よい先師たちの言伝えから、

物語の如意宝珠を引き出すことを願うメールトゥングのために、
ダルマ・デーヴァが百通りにも異なった形で伝えられている物語でもって、
いわゆる助太刀をしてくれた。

|| 4 ||

グナチャンドラ・ガネーシャが

心喜ばせること「マハーバーラタ」⁷にも劣らない
新書「プラバンダ・チンターマニ」の
第一稿をここに生み出した。

|| 5 ||

古い物語は何度も聞かれたことから、

賢者の心に喜びを与えない。
そのため、私はあまり時代の離れていない人々の事柄を集めて、

「プラバンダ・チンターマニ」を作っている。

|| 6 ||

物語は、賢者が自分の理解に基づいて語るものであり、

その性質上かならず相違があることであろう。
それでも、この書は良き伝統を基にして編まれたものであるから、

賢者はそれに対して批判を加えてはならない。

|| 7 ||

ヴィクラマ・アルカの物語⁸

生まれは卑賤であるが、勇氣と物惜しみのなさなどの徳によって、

ヴィクラマ・アルカは地上第一の帝王となった。
そこで私は始めに、聴く者にとっては耳を甘露に浸すような、かの王の物語を、
もともと長大な話ではあるが、
それを大きく端折って、少しだけ語ることにする。

|| 1 ||

【第1話】

アヴァンティ国⁹のすプラティシュターナという名の町に、ヴィクラマという名のラージ
プート¹⁰がいた。並外れた、底知れぬ剛勇さを持ち、身体には高貴な印があり、勇氣など
のさまざまな徳に満ち満ちていた。しかし生まれたときから貧困に苦しみ、いろいろな優
れた計画を練って、百以上もの方法で富を求めたがうまく行かなかった。ある時、バツタ
マートラという友人とともにローハナ山に向けて出発した。それからその山の近くにある
プラヴァラという名の町の、ある陶工の家に泊まった。ヴィクラマは夜明けにバツタマ
ートラを使いに行って土を掘るためのシャベルを求めた。

陶工の言うことには「ここの鉱山の中に入って、早朝に、どんなよい知らせも聞かないうちに額に手の平を当てて『ああ、運命よ!』と叫びながら、シャベルをふり下ろすと、そこに現れる宝石をそっくり手に入れることができる。」

バッタマートラはその話を陶工からしっかりと聞いたが、その目的でヴィクラマに悲嘆を起こさせることもできず、シャベルなどの道具を持って宝石を掘るために鉱山の中に入った。ヴィクラマがシャベルを振り上げたとき、バッタマートラが言った「ある外国人がアヴァンティからやって来たので、あなたの家について何かよい知らせがないかと聞いたところ、あなたのお母さんが死んだと言いました。」

熱したダイヤモンドの針のようなこの言葉を聞いて、ヴィクラマは額を手の平で打って、「ああ、運命よ!」と言いながら、シャベルを手の平から投げ出した。そのシャベルの先に当たって砕けた地面から12万5千ルピーもの値打のある宝石が燦然と現れた。バッタマートラはそれを持ってヴィクラマとともに戻った。それからヴィクラマを悲しみ・恐れ・心配から解放するために、その鉱山のいわれについて話し、その後になって彼の母が健在であることを告げた。ヴィクラマは、生来の貪欲性を見抜き、怒って、バッタマートラの手から宝石をひったくり、ふたたび鉱山の入口にやって来た。

ローハナ山の恥知らず、

貧困にくるしむ者の傷を癒す山と言われるが、
救いを求めるものが

「ああ、運命よ!」と言ってはじめて宝石を与えるとは。¹¹

|| 2 ||

このように言って、皆の目の前でその宝石をそこへ投げ込み、ふたたび国から国へ放浪しているうちに、アヴァンティの郊外にやってきた。

甲高い軍鼓の音を聞いて状況を悟り、太鼓に手を触れた。たちまち彼は王宮に迎え入れられた。そしてまさにその時に¹²大臣たちによって、一昼夜だけ続く王位につけられた。ヴィクラマは洞察力をもちいてこのように考えた。「この王国に対して何か魔物か神が祟りをしていて、王を毎日一人一人殺しているのだ。そして王のいない状態を作りだしてこの国を滅ぼそうとしているのだろう。だから、敬意か腕づくによってなだめるのが適当だ。」

さまざまな馳走珍味を用意させ、夕方に、宮殿の最上階の部屋で完全武装をして、神像の前でランプを揺らせる夜の儀式の後、王はそこに重しを枷として取り付けたベッドを置き、そのベッドに上質のドゥクーラ布のターバンを巻いた枕を置いて、自らはランプの陰に隠れ、剣を手にし、三界一の勇気をもって、空中を一心に見上げていた。

そのようにして待っていると、真夜中に窓を通して、最初に煙、そして炎、それからすぐ目の前に、死神の像そのままの恐ろしい姿の魔神が現れた。その魔神は飢えでやせ細っ

た腹をしていたが、目の前のご馳走を腹いっぱい食べ、香料を身体に塗り付けて、檳榔子(びんろうじ)の実を味わい、大いに喜んでそのベッドに座って、ヴィクラマに言った。「おい、その男。わしはアグニヴェーターラという名で、インドラ神¹³の門番だ。わしは王を毎日一人ずつ殺している。だが、おまえのこの敬意を嬉しく思うから、おまえに王国を保証付きで与えよう。しかし毎日これだけの馳走珍味をわしに捧げよ。」

このように二人の間に合意がなつてしばらく時が立ったあと、ヴィクラマ王は自分の寿命の長さを聞いた。「わしも知らぬ。だが、わしの御主人に聞いてみてあなたに知らせよう」と言って、アグニヴェーターラは去った。

次の夜またやって来て「偉大なインドラ神はおまえに百年きっちりの寿命を与えたもうた」と言った。王はアグニヴェーターラの言葉を遮り、二人の友情を強く訴えて、「インドラ神の力で、この百年を一年だけ長くまたは短くさせてもらってくれないか」と言った。そこでアグニヴェーターラはその願いを引き受けて、またインドラ神のもとに行き、帰ってきて言った「大インドラ神でさえおまえの寿命を九十九年にしたり、百一年にすることはできない。」

この決定を知って、次の日、王はいつもの馳走珍味などの料理をやめさせ、戦いの準備をして夜に待っていた¹⁴。アグニヴェーターラはそこへいつものようにやって来たが、料理が見えないのに腹を立て王を非難した。二人の間に長い間決闘が行われたが、徳を味方に持つ王が相手を地面の上に投げ倒し、足を相手の心臓の上に置いて「好みの神を念ぜよ」¹⁵と命令すると、アグニヴェーターラは王に言った「あなたの並外れた勇氣に感服した。このアグニヴェーターラは、あなたの家来となり、どんな命令にも従います。」

このようにして、ヴィクラマの王国から刺がなくなった¹⁶。このように、世界中に並ぶ者のない勇氣を持ったヴィクラマは、九十六の敵王たちの国々を自分の領土にしたのである。

荒ぶる軍象が、あなたの水晶の宮殿の壁に写った自分の姿を遠くから見て、

あなたの敵の軍隊の象だと思い、怒って突進し、

自分の牙を折ってしまった。

ふたたび壁に写った自分の姿を見て、牙のない雌の象だと思い、

優しく優しくそれを撫でた。

おお、サーハサ・アンカ(勇氣を自らの印として持つもの)よ。

|| 3 ||

カーリダーサをはじめとする偉大な詩人たちにこのように称えられて、ヴィクラマ王は長い間、大帝國を統治した。

さてこの時にまさに適切な、大詩人カーリダーサ¹⁷の起源について簡単に述べることにしよう。

【第2話】

アヴァンティの町のヴィクラマ・アーディティヤ王にブリヤング・マンジャリーという王女がいた。王女の教育はヴァラルチという名のパンディット（学者）に委ねられていた。彼女はたいへん頭が良く、その先生のもとでほんの数日で全ての教科を終えてしまった。若さいっぱいでもお父さんからかわいがられていた。

ある時、春になって王女が丸窓の側で安楽椅子に座しているとき、真昼の燃えるように暑い道を先生がやって来るのを見つけ、先生がバルコニーの陰で立ち止まったときに話しかけた。彼女は熟して食べごろになったマンゴーをいくつか見せながら、先生がそれを欲しがっているのを見て、「このマンゴーは、冷たいのが好きですか、熱いのが好きですか」と言った。そのことばに意地悪な意味が込められているのも知らずに、先生が「熱いのが欲しい」と答えると、マンゴーを受け止めるために広げた先生の上着の端をかすめるように果物を投げた。地面の上に落ちて塵にまみれた果物を先生が両手の手の平に持って、息を吹きかけてその塵をはらっていると、王女が嘲笑を込めて言った。「マンゴーが熱すぎるから息で冷やしているんですか。」

彼女の嘲笑を込めた言葉に腹を立て、かのバラモンが言った。「なんと根性の悪い人だ。あなたは師を侮る気持ちが強いから、牛飼いを夫に持つだろう。」この呪いの言葉を聞いて、王女が言った。「三つのヴェーダを修得したおまえよりもずっと優れた学識を持った最高の師たる者と、私は結婚します。」彼女はこのように宣言した。

さて、ヴィクラマは王女にふさわしい花婿を見つけたいと深く心配していた。かのパンディットはある時、優れた花婿を捜すことに心痛の極に達した王の命令を受けて森の奥深く入って行った。身体もふるえるほど強い喉の渇きに襲われ、どこにもバラモンの姿が見あたらないので、一人の牛飼いをを見つけ、水を所望した¹⁸。

その牛飼いが「水がないから牛乳を飲め」と言い、「カラチャンディーを作れ」と言ったとき、そのバラモンはどんな辞書にも載っていない、いままで聞いたこともないこの言葉を聞いて、考え込んでしまった。牛飼いは自分の手をバラモンの頭に当て、雌牛の腹の下に頭を押し込んで、バラモンの両手を合わせてカラチャンディー（手を合わせて三日月の形——お椀の形）¹⁹を作らせ、お腹いっぱい牛乳を飲ませた。バラモンはその牛飼いが手を自分の頭に当てたことと²⁰、カラチャンディーという知らない言葉を教えてくれたことから、その牛飼いが師を凌ぐ者だと考え、王女にふさわしい婿だと確信し、牛飼いの仕事から引き離し、自分の屋敷に連れて行って6カ月のあいだ姿形を美しくした後、「オーム・ナマハ・シヴァーヤ（オーム！シヴァ神に栄光あれ！）」という祝福の言葉を教えた。6カ月の後、その言葉が彼の喉にしっかりと植えつけられたことを確かめて、吉兆の時刻にパンディットはその牛飼いに美しい衣服を着せて王宮の謁見の広間に連れてきた。牛飼いは何度練習した祝福の言葉を王宮に来た緊張から、「ウシャラタ」と発音して王のもとにやって

来た。そのわけのわからない言葉に驚いた王に対して、パンディットは牛飼いが並々でない知恵の持ち主であることを信じさせようとして、

ウマー女神に伴われ、手に矛を持ち、その叫び声の雄々しさを誇る
最強の神シャンカラが汝をお守りするように、おお我が王よ。²¹

|| 4 ||

というシュローカ（頌詩）を作って、その若者が深い学識を持っていることを言葉を膨らませて説明した。王はパンディットの保証にたいへん喜び、その牛飼いを自分の娘と結婚させた。

牛飼いはパンディットの指示に従って、ずっと無言を保っていたが、王女は彼の知性を知りたく思い、新しく書かれた本を持ってきてその本の価値を調べてくれと彼に無理やり押し付けた。彼が手の平に本を置いて、文字の母音表示の部分をただ爪を切る要領で落とすことしかしなかったので、王女は、この男が馬鹿だと決めてしまった。このときから「夫の試験」という言葉が至るところで評判になった。またある時、壁画に多くの牛が描かれてあるのを見て大いに喜んで、自分の立場を忘れて牛を呼ぶのに適切な野蛮な言葉をはいたので、王女はこれは牛飼いだと断定した。若者は王女に軽蔑されていることを知って、知恵を授かろうとカーリー女神²²に一心に祈った。王は娘が寡婦になることを恐れ、ある夜、女官をカーリー女神に扮装させて送り込んだ。女官が「おまえの信仰心を嬉しく思うぞ」と言って彼を立ち上がらせたとき、破局の訪れを恐れたカーリー女神が自ら姿を現し、彼を迎え入れた。

その事を知って喜んだ王女がそこへやってきて、「なにか言葉に秀でた者の印がお身体にございますわ」²³と言った。その時から彼はカーリダーサ（カーリーのしもべ）という名で有名になった。『クマラ・サンバヴァ』に始まる三つの大詩編と六つの物語を創作した。以上がカーリダーサの起源についての物語である。

【第3話】

また他の時、その町の住人でダーンタという名の金持ちが、宮廷にいたヴィクラマ王のもとに、手に捧げものを持ってやってきて、挨拶の後、次のように言った。「陛下、私は吉兆の時刻に最高の大工たちを雇ってすばらしい屋敷を立てました。大いに喜んで私はその屋敷に入りました。そこで夜になってベッドに入り、眠りに落ちようとしていた時に、『落ちるぞ』という聞きなれない声を聞いて恐れに心も混乱して、『落ちるな』と叫んですぐに屋敷を飛び出しました。その屋敷を建てるに際しては、最高の占い師たちや大工の頭領たちを集め、その時々によさわしいさまざまな儀式を行い、十分なお祭りをして、建て方にはまったく非の打ち所がありません。このことについて、陛下に判断していただきたく存

じます。』

その話を詳細に確かめて、その屋敷の代金として30万ルピーをダーンタに払い、夕方になっていろいろな儀式をすべて終えた後、自分のものになった屋敷でヴィクラマ王は心地よく眠りに落ちた。例の「落ちるぞ」という声を聞いて、世に並びのない剛胆さで「早く落ちろ」と言うと、真前に落ちてきたスヴァルナ・プルシャ（金人）²⁴を手にいれた。このようにしてスヴァルナ・プルシャを完全に自己のものにしたのである。

以上がスヴァルナ・プルシャ獲得の物語である。

【第4話】

また他の時に、一人の貧相な男が、手製の鉄で作った瘦せこけた貧乏神の像を持って、門衛に案内されて入ってきた。その男は王に次のように言った。「陛下、陛下の守護のもとにあるこの有名なアヴァンティの町では、どのようなものでもたちまち売れてお金が入るという名声を聞いて、84もの十字路を夜も昼も貧乏神の像を売るために歩き回りましたが、誰も買ってくれませんでした。それどころか、私は脅され嘲笑されました。町についたこの汚点を陛下にお知らせしてから、もと来た道を帰ろうと思い、陛下においとまを申し上げに参りました。』

その時、町に重大な汚点がつくことを考えて、10万ディーナーラの金を彼に与え、王は貧乏神の鉄の像を蔵に納めさせた。その夜の第一の当直時間²⁵に、ぐっすりと眠っていた王の前に王の象軍の守護神が現れ、第二の当直時間には馬軍の守護神が現れ、そして第三の当直時間には幸運と繁栄の女神であるラクシュミーが現れて、「陛下は貧乏神を買われましたから、私たちがここに居続けるのは正しくありません」と暇乞いをした。彼らは、王から「汝らの勇気がくじかれることのないように」と言う許しの言葉を得て去った。しかし第四の当直時間に、威厳のある、神々しい光を放っている姿の男が現れ、「私は『勇気』という名のものですが、お暇をいただきに参りました」と言うと、王は手の平に短刀を握って、自分を殺そうとした。その男は王の手をとどめて「嬉しく思います」と言ったので、王は思いとどまった。象軍の守護神などの3人の神々も戻ってきて、王に言った「私たちは、王のもとを去るという合意を破った『勇気』に騙されていたのです。だから王のもとから去って行くというのは正しくありません。」このようにして彼らは簡単に王のもとに帰ってきた²⁶。

以上がヴィクラマ・アーディティヤの勇気に関する物語である。

【第5話】

また他の時に、ヴィクラマ王が宮廷にいと、体相学²⁷に通じた外国の者が通されてきた。その男は入ってきて王の身体の相を観察しながら頭をひどく振っているのを、王は彼

がどうしてそのように気を落としているのかと聞いた。男の言うことには「陛下、あなたは王としての印が身体にまったくないにも関わらず、96カ国を合わせた帝国の富を享受しておられるのを見て、体相学に対して不信感がいっぱいになりました。まだら模様のついた内臓をお持ちなら、その力で今の地位を保っておられることがわかるのですが、それは見るわけには行きません。」

彼の言葉が終るや否や、王は短剣を引き抜いて自分の腹に当てた途端、「これはどういう事ですか」と聞かれて、ヴィクラマ王は「腹を切り割いて、そういう内臓を見せようと思う」と言った。「王にふさわしい32の体相よりも優れた、陛下の持つこの勇氣という印に私は気が付いていませんでした」とその男が言うと、王は褒美の品を与えて帰らせてやった。

以上が勇氣の試験についての物語である。

【第6話】

それからまた他の時、「他人の身体に入る術」を知らなければ、他の術はすべて時間の無駄使いだと聞いて、ヴィクラマ王はそれを学ぶためにパルヴァタ山のパイラヴァ・アーナンダというヨーガの行者の所へ行き、長い時間をかけてお願いをした。以前に王に仕えていたあるバラモンが「私を差し置いて『他人の身体に入る術』を師匠から習うのは正しくない」と言ったので、王は自分にその術を教えることに同意した行者に、バラモンに先に教えるようお願いした。行者は「この者は術を学ぶにはまったくふさわしくない人物だ」と言い、何度も何度も「後にあなたに災難が襲って来るぞ」と言ったけれども、王が言い張ったので、そのバラモンに術を授けた。そこから戻ってきた二人は王都のウツジャイニー（アヴァンティ）に着いたが、王の家族が王の象の死で悲嘆にくれているのを見て、「他人の身体に入る術」を試してみるために、王は自分の象の身体に自ら入って行った。それからの話は次の通りである。

バラモンに身体を見張らせて、王は術を使って自分の象の身体に入った。

バラモンは王の身体に入った。王はそれからペットの鸚鵡となった。

王がヤモリの身体に入ると、王妃が死ぬのを恐れて

バラモンが鸚鵡を生き返らせた。王は自分の身体を取り戻した。²⁸

|| 5 ||

このようにヴィクラマ・アルカ王は「他人の身体に入る術」を獲得した。

以上が術の獲得に関する物語である。

【第7話】

また他の時に、ヴィクラマ王が都を歩いていると、その町のジャイナ教徒たちに周りを

取り囲まれ、多くの人々に「全知者」と称えられているシッダセーナ・アーチャーリヤがやって来るのを見て、王は「全知者」という言葉に腹を立て、「全知」の真相を試すために、シッダセーナに心の中で挨拶を送った。ところがシッダセーナは、全知者の力によってそれが王であることを知り、右手を上げて「ダルマ（真実の法）を悟れるように」という祝福の言葉を送った。王が「どうして祝福の言葉をおっしゃったのですか」と聞くと、その聖人は「あなたが心でなされた挨拶に対して祝福を送ったのです」と言われた。師の知恵に驚いて、王は褒美として1千万ルピーの黄金を与えた。

【第8話】

また他の時に、王が財務長官にシッダセーナに与えた黄金についての報告を求めると、財務官は「慈善記録帖に私は次のようなシュローカ（頌詩）をかいて金の下賜を記録しておきました」と答えました。

「ダルマを悟れるように」と言って、
遠くから手を上げたシッダセーナ・スーリ（師）に対して
王は1千万ルピーを与えた。

|| 6 ||

それからシッダセーナ・スーリを宮廷に招いて、「あの黄金をお受けください」と言うと、「腹一杯の者に食べ物を与えても無駄なこと」²⁸と言われ、「この贈られた黄金で、貧窮に苦しんでいる世の人々を救いなさい」と指示されて、スーリの言葉に大いに喜んだ王は、それに従うことを約束した。

【第9話】

その同じ夜、王が冒険を求めて町を歩いていると、油売りが何度も何度も次の詩を唱えているを聞いた。

我らの王はナーラーヤナ・クリシュナと呼ばれるべきだ。

夜通し待っても、その歌の後の半分を聞けなかったので、がっかりした王は宮殿に着いて眠った。夜明け近くなって、その時々にはふさわしい儀式の後、王がその油売りを招いてその歌の後の半分を聞くと、

貧窮に沈むこの世界が、税金の絆から解き放たれるように。³⁰

|| 7 ||

これを聞いて、シッダセーナの指示が繰り返されたと思い決め、世界を貧窮から救うことを始めた。

【第10話】

また「私と同じジャイナ教徒の王が将来現れるでしょうか」と聞かれて、シッダセーナ・スーリは次のように詠った。

今から1199年を経ると、クマーラ王が出て

あなたと同じ王になるであろう。おお、ヴィクラマ王よ。³¹

|| 8 ||

【第11話】

また他の時に、世界を貧窮から救っているときに、自分の気前の良さに慢心を起こし、明日の朝「名声の柱」を立てようと思っていた。その夜に冒険を求めて四つ辻のまん中を歩いていると、二頭の猛り立った雄牛に恐れをなし、極貧のバラモン家の古い牛小屋の柱に上るとたちまち、その二頭の牛が角の先でその柱を何度も突いた。一方、家の中ではそのバラモンが突然眠りから覚め、月始めの空に、月の周りの円光が金星と木星の光に妨げられているのを見て妻を起こし、月の円光に等しい王の命が危険にさらされていることを知って「王の危険を除くための犠牲祭をするために材料を持って来る」と言った。その言葉を王が注意深く聞いていると、妻が夫に言った「この王は世界から貧乏を取り除いているが、わが七人の娘の結婚に少しも金をくれない。鎮めの儀式で王の危険をなくすことが、どうして必要なのか。」

彼女の言葉で、王は慢心を完全に捨て去り、その危険を逃れた後「名声の柱」のことはすっかり忘れ、長く王国を治めた。

以上がヴィクラマ・アルカが慢心を捨てた事についての物語である。

【第12話】

ある時、晩年になって、ヴィクラマ王の健康がすぐれないとき、ある『アーユル・ヴェーダ』³² 医学の専門家に「鳥の肉を食べると病気が直りますよ」と教えられ、その料理をさせていると、その学者は王の本来の性質が変化したことに気づき、王にこのように言った。「この場合、ダルマ（真実）という薬だけが効力があります。陛下の本質に変化が起りました。命に対する執着から、世に卓越した勇気という本質を捨てて鳥の肉を求めておられますが、それではどちらにしても命を長らえることはないでしょう。」

このように言われて、王は医師に褒美の贈物をして「最高の友」と賞賛し、象・馬・宝物など全てのものを貧窮の者に与えてしまい、家族と都に別れを告げた。一人で宮殿の最

上階の一部屋で、その時にふさわしい沐浴とお供えをして神を賛嘆した後、ダルバ草で作った座に登り、「ブラフマ門によってこの世を去ることにしよう」³³と考えていると、一群の天女がどこからともなく現れた。王はアンジャリ³⁴を作り、挨拶をしてから

「あなたたちはどなたですか」と聞くと、天女たちは

「今は長い話をするときではありません。ただ私たちはお別れの挨拶をするために参ったのです」と言って、そこから去りかけると、再び王が話しかけた。

「新しいブラフマ神によってこの世に送られてきたあなたたちは皆、世に二人とない優れた姿をしておられますが、ただ一人だけお鼻がないように思われます。どうしてだか知りとうございます。」

すると彼女たちは手を打って笑い

「ご自分の過ちを私たちのせいにしていらっしゃる」と言って、あとは黙っていると、王がまた言った。

「どうして私の過ちが天上の住人のあなたたちのせいにされているのですか」と王が言い終わると、彼女たちの長で、特別に美しい天女が言った。

「陛下は前世に徳を積まれたために、今生では陛下の宮殿に九つの宝庫が降りてきました。私たちはその宝庫の番人だったのです。陛下は生まれてからずっと、まったく物惜しみしないでものを与えてくれましたので、宝庫が一つだけ空になりました。それで彼女の鼻の先が見えなくなったのです。」

この言葉を聞いて、王は自分の額に手の平を当てて

「もし私に九つの宝庫が降りていることがわかっていたら、九人の人に与えてやったのに」と言い、また「自分が無知だったから神々に騙されたのだ」と言った。

そして天女たちに「このカリの時代³⁵で、陛下が最高の慈善者です」と称えられながら、次の世に旅立った。この時から今になるまで世界中にかのヴィクラマ・アーディティヤの紀元が広く行われるようになった。

以上、ヴィクラマ王のさまざまな物語を伝聞のごとくここに記した。

注

1. オーム：古来インドで最も神聖だとされる言葉。宗教儀式の前後に唱えられ、また、宗教書の最初に現れる。A・U・Mの三音からなると言われ、それぞれヒンドゥー教の3大神であるブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァを表すと考えられている。仏教では密教系の宗派以外では使わない。
2. ジナ・ルシャバナータ：ジャイナ教では歴史上の始祖ジナ・マハーヴィーラの前に23人の元祖がいたと信じられ、それらをティールタンカラと呼んでいる。大乘仏教での

「過去仏」に相当する太古の祖師である。ジナ・ルシャバナータは第1番目のティールタンカラとして広く崇拝の対象となっている。なお「ジナ」とは「勝者」という意味であり、仏教での「ブッダ（仏陀）」に相当する言葉である。

3. 生死に終わりをもたらす者：生死（迷いと輪廻の生）に沈む衆生に最終的な解脱の道を明らかにした者——ジナに対する賛嘆の言葉。
4. サラスヴァティーは『リグ・ヴェーダ』の時代（紀元前1500年頃）には、西北インドのインダス河もしくはそれに平行して流れた大河を指していたが、その頃からすでに豊饒の女神として崇拝された。紀元後ヒンドゥー教が盛んになると、学問の女神として広く崇拝され、仏教と共に日本に入って「弁財（才）天」として祭られている。なお「四つの扉」とはジャイナ教における四つの学問分野をさすものと言われている。
 なお、ページの右端に現れる番号は、スタンザの順番を表す。
5. チャンドラ・プラバは第8番目のティールタンカラ。「チャンドラ」は「月」「プラバ」は「光、輝き」を表す。月の光は「月光石moonstone」を溶かすと言われる。
6. 書籍の紐を解く：インドの伝統的な書物は、椰子の葉から作った長方形の紙にインクで書き付け、それを紐で結んでまとめたのでこのように言っている。
7. サンスクリット語で書かれた、世界最長の叙事詩。今のデリー周辺を領域としたバラタ族に起こった骨肉相争う戦争を主題としている。ヒンドゥー教徒の聖典であり、その中にある「バガヴァッド・ギーター（神の歌）」は特に尊敬を集めている。
8. ヴィクラマ・アルカ Vikramārka はヴィクラマ王の呼び名の一つで、ヴィクラマ (Vikrama) は「勇気、勇猛」を意味し、アルカ (arka) は「光、太陽」を意味する。「勇気によって輝くもの」または「勇気という光輝をいただいた者」という意味であろう。より有名な「ヴィクラマ・アーディティヤ」("Vikrama"と "aditya" (太陽) の合成語) も同じ意味である。なお中国の史書は、ヴィクラマ・アーディティヤと号したグプタ王朝のチャンドラグプタⅡ世を、その号の意味をとって「超日王」と呼んだ。
9. アヴァンティ国：今のグジャラート州の東、マールワ地方を言い、古来貿易の要衝として栄えたところ。その首都をアヴァンティとも、ウッジャインーともいう。
10. ラージプート：「解説」にも述べたように、ラージプートは日本の武士に相当する階級の者である。
11. ローハナ Rohaṇaと言うのは「癒すもの」という意味である。貧者の苦しみを癒す山と言われながら、実際は貧困に苦しむものが、自分を卑屈にして乞い求めないと救いを与えないその偽善性を非難していると思われる。
12. 国王が位につくときは、星占いによって最も運勢のよい日時を定めるのが決まりであるが、この場合は国王がない状態で亡国の危機に瀕しているので、「国王募集」の太鼓の音に応募したヴィクラマを直ちに王位につけたのである。

13. インドラ神：『リグ・ヴェーダ』では神の中の神、最高神であったが、ヒンドゥー教ではその地位を三大神（シヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマー）に譲った。しかし、それ以外の神々の中では最高位にある神と考えられた。
14. ヴィクラマは100年の寿命があることがわかり、最高神のインドラでさえそれを変えることができないのであるから、これ以上アグニヴェーターラに服従している必要はないわけである。
15. 「好みの神を念ぜよ」：「覚悟を決めろ」という意味。
16. 「王国から刺がなくなる」：王国を脅かすものがなくなった。
17. カーリダーサ：インド随一の詩聖。サンスクリット文学の最高峰といわれている。紀元4世紀後半から5世紀初頭に、グプタ朝最盛期チャンドラグプタⅡ世の時代に活躍した。
18. 四姓制度で最高の地位にあるバラモンは、同じバラモン以外の者から水をもらって飲んではいけないことになっているが、このような極限の状態では卑しい身分の者から水を得ることは許される。
19. カラチャンディー：サンスクリットにはない言葉で、おそらく当時の俗語であろう。
"kara"は「手」、"candī"は「三日月」を意味する。
20. 手を他人の頭に当てられるのは、師と言われる人だけである。
21. 「ウ・シャ・ラ・タ」の四つの音をそれぞれ頭に持つ詩頌を作ってその場をしのいだのである。
ウマー、シャンカラ、ラクシャトゥ（お守りするように）、タンカーラ（叫び声）
なお、シャンカラはシヴァ神の別名、ウマーはその妻パールヴァティー女神の別名であり、どちらも破壊と創造を司る強力な神々である。
22. カーリー女神：シヴァ神の妻パールヴァティーの別名。
23. インドの体相学では、人はそれぞれの資質に応じてさまざまな「印」が身体に現れると信じられている。
24. スヴァルナ・プルシャ："svarṇa"は金、"puruṣa"は人を意味する。他の伝説によると、これは金でできた人形であり、たとえばその指を折り取って貧しいものに与えると、また指が生えてきてもとの姿に戻ると言うことである。そのため、ヴィクラマ王は無尽蔵の富を得たことになる。ここに紹介した話はまた、ヴィクラマの思慮深さと剛胆さをも物語っている。
25. 第一の当直時間："prathamayāma"を訳した言葉。"yāma"は一日の8分の一の長さで、約3時間。
26. 貧乏神の鉄の像をもたらしした男の話は、他の書物では、ヴィクラマの繁栄を妬んだ敵王の謀略とされている。騒ぎを起こさせてヴィクラマの王都に汚点をつけるためと、

その像の力でヴィクラマの幸運を奪い取ろうというわけである。ここでもヴィクラマは勇氣と剛胆さで克服し、財産や武力よりも「勇氣」が最も大切なことを表明している。勇氣によってヴィクラマは貧乏神さえ呑み込んで、いや増しに栄えたのである。

27. 体相学：身体に現れる印を判断してその人の運勢を占う学問。
28. この話は後半を韻文の中に凝縮しているが、もともと会話文も入ったもっと長い話であった。ここの所をもう少し説明すると、バラモンに身体を見張らせて王が象の身体に入っている間に、バラモンは悪心を起こして王の身体を取ってしまい、王になります。そこで王は王妃の可愛がっていた鸚鵡になるが、王妃は鸚鵡に大変な愛着を持っており、鸚鵡が亡くなれば自分も生きていないと約束する。そこで王がヤモリの身体に入り、鸚鵡が亡くなった状態になると、王妃が鸚鵡との約束で身を火に投じて死のうとするのを阻止するために、バラモンが鸚鵡の身体に入る、そして王はやっと自分の身体を取り戻し、バラモンは自分の行為を恥じて、一生鸚鵡のままにいるということになった。王は勇氣と剛胆によって自分の身体を取り戻すと共に、「他人の身体に入る術」という魔法の術を身につけたのである。
29. 「腹一杯の者に食べ物を与えても無駄なこと」：世間的な欲望を完全に離れたものは、富や財産をいくら積まれても、まったく欲しいと思わない。
30. このアパブランシャ語で書かれた二行の詩は二重の意味を持っていて、二行目は次のようにも読めるようになっている。

「貧窮に沈むこの世界が、バリの絆から解き放たれるように。」

ナーラーヤナ・クリシュナはともにヴィシュヌ神の生れ変りの姿であり、神話によると、世界が魔神のバリに支配されていたときに、ヴィシュヌ神が小人のヴァーマナになって現れ、バリを征服してこの世を救ったという。"bali"はまた税金という意味があるので、本文のような訳になる。すなわち一行目では、王は自分がヴィシュヌ神に等しいものだと言われていると思うのだが、二行目で、自分は実際は過重な税金で人々を苦しめていると非難されていることを知る。「ヴィシュヌ神が魔神バリを征服して世界を救ったように、王も税金の苦しみから人々を救って、ヴィシュヌの生れ変りナーラーヤナ・クリシュナと呼ばれるようになりなさい」という意味である。

31. シッダセーナは「全知者」であり、過去・現在・未来がすべてわかるので、このように1199年後に現れる有名なクマラーパーラ王の出現を予言しているのである。クマラーパーラ王はグジャラートのチャウルキヤ王朝最盛期の王で、在位時期はヴィクラマ紀元で1199年から1228年（A.D. 1142-1171）である。深くジャイナ教に帰依し、ジャイナ教の僧ヘーマチャンドラの指導を受けてジャイナ教の教えに従って政治を行ったと言われる。ここに著者のメールトゥンガがヴィクラマ王／シッダセーナとクマラーパーラ王／ヘーマチャンドラを対比させていることがわかる。

32. 『アーユル・ヴェーダ』医学：インド古来の医学で、その聖典を『アーユル・ヴェーダ』（命についての知識）と言う。
33. ブラフマ門：頭の頂点にある縫い合わせ。ここを通じて魂が抜けて行くと考えられた。
34. アンジャリ：両方の手の平をお椀の形に合わせ、額に当ててする挨拶。
35. カリの時代：インドの歴史観で、四つの時代区分のうちもっとも墮落した現代のこと。

参考資料

Arai, Toshikazu. Structural Analysis of the Prabandhacintāmaṇi with Special Attention to the Jaina Ideal of Kingship.

(1979年に筆者がハワイ大学に提出し受理された博士論文)

Jina Vijana Muni, ed. Prabandha Cintāmaṇi of Merutungācārya, Part I.

Singhi Jaina Series No. 1.

Śāntiniketan: Siṅghī Jaina Jñānapīṭha, 1931.

Jina Vijaya Muni, ed. Purātana Prabandha Saṅgraha.

Singhi Jaina Series No. 2.

Śāntiniketan: Siṅghī Jaina Jñānapīṭha, 1936.

Majumdar, A. K. Chaulukyās of Gujarat.

Bombay: Bhāratīya Vidyā Bhavan, 1956.

Monier-Williams, Sir Monier. A Sanskrit English Dictionary; etymologically and philologically arranged, New Edition.

Oxford: Clarendon Press, 1960.

Mookerji, Radha Kumud, ed. Vikrama Volume. Ujjain: Scindia Oriental Institute, 1948.

Schubring, Walther. The Doctrine of the Jains; described after the old sources, translated from the revised German edition by Wolfgang Beurlen.

Delhi: Motilal Banarsidass, 1962.

Tawney, C. H. tr. The Prabandhacintāmaṇi or Wishing-Stone of Narratives.

Calcutta: The Asiatic Society, 1901